



**TREE of  
International  
Exchange**  
対話から未来をつむぐ

नमोऽस्मै

hello

こんにちは

नमस्ते

你好

안녕하세요

# はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) は、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現をミッションとして、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。その活動の一つとして、2001年より日本と韓国・中国・タイ・インドとの間でそれぞれ二国間の教職員国際交流事業を行ってきました。2023年3月現在は文部科学省委託「新時代の教育のための国際協働プログラム」として実施しています。この度、ACCUの教職員国際交流プログラムの20年にわたる成果と参加者の声を現場の方々の手に届きやすい形でまとめるため、本書「TREE of International Exchange - 対話から未来をつむぐ -」を日本語・英語の2言語で制作することとなりました。

本書のタイトルに入っている“TREE”は、プログラム関係者のためのウェブサイト“Asia-Pacific Educators’ Platform: TREE”に由来します。教職員国際交流プログラムは Transformative learning (変容する学び)、Respect for diversity (多様性への理解と寛容性)、Exploration (探究)、Exchanges (交流)の場です。

本書は国際交流の「場」の紹介(第1章)、先生方の声を聴く「対談と寄稿」(第2章)、教職員国際交流トピックス(第3章)で構成されています。本書は、ACCUが実施する教職員国際交流プログラムに参加経験のある3名の先生方と制作委員会を組織し、議論を深めながら、ACCUと先生方の協働で制作を進めてきました。

特にオンラインでの交流の機会が増えている昨今、教職員国際交流プログラムの中核を担うのが先生方同士の「対話」です。本書では、対談及び寄稿を通して、私たちが大切だと考えている「対話」をそのまま発信することで、本事業のこと、本事業に携わってくださる先生方、子どもたちの物語や輝きをより多くの方に伝えたいと考えています。本書を手にとってくださった方に、先の見えない時代にあっても、よりよい未来へ向かって国を超えてともに歩むことができると感じていただき、それぞれに新しい可能性を見出したり、ヒントを得たりしていただけるような一冊となれば幸いです。

最後に、本書の制作にあたり多くの方にご協力いただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

国際教育交流部

3	はじめに
5	<b>第 1 章 先生が変わる 子どもが変わる学校が変わる 学びの場</b>
6	ACCU の教職員国際交流プログラムは“先生が主役!”
8	アジア地域の教職員同士が出会い、互いに学び合う場
9	つながりを作る、輪を広げる
10	TREE フォトコンテスト
11	<b>第 2 章 対話ではぐくむ</b>
12	TREE of International Exchange - 対話から未来をつむぐ -
14	<b>対談</b> コロナ禍を乗り越えて ～国際交流イノベーション～ 高橋 晋一 先生（埼玉県立越谷北高等学校 教諭） ジョン・ホナム（江原道教育庁 江原国際教育協会 国際教育部 教諭）
21	<b>寄稿</b> 「予測不可能な未来」が「より平和な未来」になるように 優しさを繋ぎ広げていく 松野 至 先生（名古屋経済大学市邨高等学校 教諭）
28	<b>対談</b> つながり、学びあい、アクションを起こす それは万華鏡の輝き 小川 亮 先生（北九州市立菅生中学校 教諭） プナム・ラジャージュ 先生 ( Kai. Sadashiv Urf Bapusaheb Darekar, Pune Municipal Corporation School no. 174 - B Kondhawa bk. Pune, Maharashtra, India 教諭 )
35	<b>第 3 章 教職員国際交流のコロナ禍の今</b>
40	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）について
41	おわりに

## 第 1 章

先生が変わる 子どもが変わる  
学校が変わる 学びの場



世界遺産  
訪問

専門家による

内外で  
報告会

交流

MEXT

共同授業

学校訪問

文化体験

オリエンテーション

意見交換



地域



保護者



子どもたち

同僚



# ACCUの教職員国際交流プログラムは、 先生が主役!

教育を通じた国際交流の機会は、子どもたちだけでなく大人にも開かれています。  
地域、国、校種、教科、役職、年齢など多種多様な先生方と出会い、  
対話しながら、互いの違いや共通項に気づく —  
様々な価値観をシェアすることで、潜在化していた考えや視点が言葉で  
表現され、やがてそれは、自分自身の外側と内側の学びを深めることへ  
つながっていきます。そのような機会は、先生方のすぐ目の前に広がっています。  
少しだけ手を伸ばしてみませんか?  
先生自身が変容するきっかけを提供するとともに、プログラムが終わっても、  
それぞれが経験を教育現場に還元していくことを後押しします。



※実際のプログラムは、複数の活動が組み合わされて構成されます。  
※期間：対面の場合は約1週間、オンラインの場合は1回限り、1か月の間に数回など

教育現場での国際的な相互理解推進・多様な価値観への理解

多様な文化が尊重され、平和で持続可能な社会へ

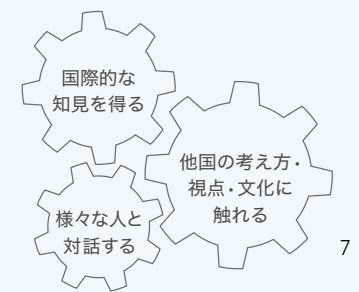
- 対話**
- ・交流会
  - ・意見交換
  - ・質疑応答
  - ・開会式/閉会式

- 協働**
- ・共同授業
  - ・授業研究
  - ・アクションプラン作成
  - ・未来志向の振り返りワーク

- 体験**
- ・文化体験
  - ・実験
  - ・音楽/映画鑑賞
  - ・教育/文化施設/世界遺産訪問
  - ・学校訪問
  - ・授業見学
  - ・写真コンテスト

- 情報収集**
- ・MEXT、教育省(教育部)の講義
  - ・オリエンテーション
  - ・専門家による講義
  - ・ハンドブックによる情報提供

- 共有・発信**
- ・学内外での報告会
  - ・報告書の制作
  - オンラインプラットフォーム  
**TREE**



# アジア地域の教職員同士が出会い、 互いに学び合う場

ACCUは、2000年からユネスコ・国際連合大学・文部科学省の委託を受けて、韓国、中国、タイ、インドとの教職員間の二国間国際交流事業を20年以上実施してきました。  
プログラムを通して延べ5,500名以上の教職員が出会い、学び合いを深めてきました。

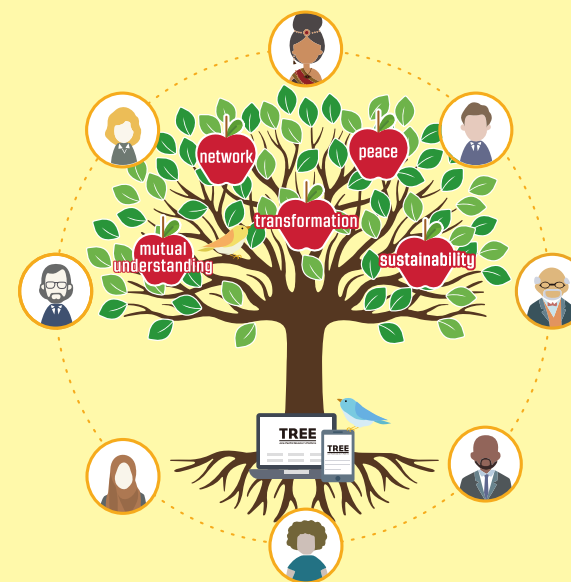
	<b>日本 Japan</b> 主催 文部科学省 企画・実施・運営 ユネスコ・アジア文化センター(ACCU) 延べ1,203名の教職員が派遣プログラムに参加(2023年3月現在、オンライン含む) 延べ224名の教職員が海外教職員との交流会に参加(2023年3月現在、オンライン含む) 延べ939の教育委員会・学校・機関が海外教職員の訪問を受け入れ(2023年3月現在、オンライン含む)
	<b>韓国 KOREA</b> パートナー機関 韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)、韓国教育部(MOE) 2001年から2023年3月までの間に、2,336名の教職員が参加(オンラインを含む)
	<b>中国 China</b> パートナー機関 中国教育部(MOE) 2003年から2023年3月までの間に、1,782名の教職員が参加(オンラインを含む)
	<b>タイ Thailand</b> パートナー機関 タイ教育省(MOE) 2015年から2023年3月までの間に、121名の教職員が参加(オンラインを含む)
	<b>インド India</b> パートナー機関 インド教育省(MOE)、インド環境教育センター(CEE) 2016年から2023年3月までの間に、101名の教職員が参加しました(オンラインを含む)

## <プログラム年表>

2001年	韓国との交流プログラム開始
2002年	中国との交流プログラム開始
2010年	プログラム開始10周年
2015年	タイとの交流プログラム開始
2016年	インドとの交流プログラム開始
2020年	プログラム開始20周年、Asia-Pacific Educators' Platform: TREE運用開始

# つながりを作る、輪を広げる

プログラム専用 SNS “Asia-Pacific Educators' Platform: TREE”で  
国内外の教職員と知り合おう！



## “TREEって、なに？”

TREEは、教職員国際交流事業に参加・協力した国内外の教職員がつながるための会員制 SNSで、2020年に日本語版・英語版の本格運用がスタートしました。

**Transformative learning** (変容する学び)、  
**Respect for diversity** (多様性への理解と寛容性)、  
**Exploration** (探究)、  
**Exchanges** (交流) の頭文字をとって TREE と名づけられました。

## TREEに参加する

こちらのQRコードから会員登録ページにつながります。  
(PC・スマートフォンどちらも可)



- ① 会員登録の申請を行う
- ② 管理者による本人確認(3営業日以内)
- ③ 登録完了メールを受信

◎ スマートフォンのホーム画面にブックマークを貼ると、アプリのように1タップで接続でき、便利です。



## こんな時に使います

- ・ 教職員国際交流プログラムにおける、事務局から参加者への資料・動画等の提供
- ・ プログラム参加者同士の情報交換
- ・ 交流相手やプロジェクト参加者を探す
- ・ 自分の教育活動を発信する
- ・ 国際理解教育などの情報を収集する

## 登録できたら…

- ・ プロフィール写真を設定する
- ・ 友達検索や申請を行う
- ・ 興味がある、参加するプログラムの談話室に入る
- ・ ほかのユーザーの投稿を見て、コメントを残してみる
- ・ 自分でも発信してみる



# TREE フォトコンテスト

TREEではメンバー間の交流の活性化を目的として特定のテーマを題材としたフォトコンテストを開催しています。今年度を実施をしたコンテストの受賞作品を以下紹介します。

## テーマ 「あなたにとっての『平和』とは？」

「平和」だと思ふ瞬間や「平和」を象徴している写真を共有しあうことで一緒に「平和」について考える機会を創りました。



夕暮れの用宗漁港(静岡県)の穏やかな海。

「平和とは？」と考えてしばらく悩んでいましたが、一日を無事に終え、空や海を眺める瞬間が私にとっての「平和」なひと時です。ささやかな平和が世界中に広がりますように！



It's happy to be able to sing freely!

内戦後、自由に芸術を楽しむことができるようになったカンボジア。もっともっと、芸術に触れることができる子どもたちが増えますように。彼らが明るい未来をつくれますように。

## テーマ 「あなたにとって教師の仕事のやりがいは何ですか？」

教師の仕事のやりがいを象徴している写真を共有しあう機会を創りました。



世界中の先生方との出会い、愛情あふれる生徒たち。これらの多くの恩恵が教師という崇高な仕事を価値あるものにしてくれます。



これは植樹の様子の写真です。未来の世代を担う子供たちと未来の地球のために行動することによりがいを感じます。

## 第 2 章

### 対話ではぐくむ

# TREE of International Exchange

対話から未来をつむぐ

本書の制作にあたり、ACCUが実施する教職員国際交流プログラムに参加経験のある3名の先生方を中心に制作委員会を組織しました。ACCUと先生方がオンラインで議論を深めながら、協働で制作を進め、最後には対面での委員会も実現し、本書に込めた熱い思いを担う「サブタイトル」へたどり着きました。

対話から未来をつむぐ

ここでは、サブタイトル決定に至るまでの先生方の実際の言葉を抜粋しています。きっと、これから教職員国際交流のとびらをたたくようにしている皆さんの背中を押してくれることでしょう。

そして次頁に続く、委員の先生方それぞれが海外教職員との対談や寄稿から、教職員国際交流プログラムをぜひ【じぶんごと】に感じてみてください。

◎教職員国際交流をめぐるキーワードを出し合い、率直な意見交換を行ないました。

最後の最後まで！  
的確なサブタイトルを  
全員で模索しました！



伊藤

◎：教職員国際交流のきっかけや  
感じていることをお聞かせください。



松野先生

教職員交流の相手国へ行ったらどう感じるか、自分が知りたかったんですね。当初は一人ぼっちだったんですけど、気付いたらはじめは無関心だった周りの先生方から優しさ・愛が出てきていて、いつの間にか組織まで巻き込んでいました。でも「義務ではない」ということも、大事だと思います。



高橋先生

◎：学校の中で他の先生方を巻きこむというのは、なかなか難しいもの  
でしょうか？

そうですね、新任の学校ではその場や先生方個人を尊重することがまずは大事なことで、時間をかけて相手のことも理解した上で踏みこんでいくことも必要だと思います。



進藤

松野先生 先生自体がプログラムの失敗を恐れず、子どもたちに「より多くの経験」をさせてあげたいです。

小川先生 教師が楽しんだったら子ども達も楽しい！僕は管理職にも強気で「～します！」と言ってます。でも温度差があって当たり前なので、自分が楽しんでる姿をみてもらいます。

◎：教職員国際交流で、先生方が  
描いている未来とはどのようなもの  
でしょうか？

教師だけでなく、地域の人との関わりの積み重ねで、人ごとではなく自分ごととして捉えられるようになる。それが、世界の人を思いやる気持ちにも繋がる。2030年をこえても、「子どもたち自身が持続可能な社会を目指し続ける力」をつけてあげたいんです。人がつながればなんとかなるんです！



小川先生

松野先生 言葉を選ばずという... どうせ生きているんだったら！「優しさ」を子どもたちの未来に繋げたい！そういう社会を作りたい！と思うんですね。

高橋先生 普段は勉強が一番になってしまいがちですが、子どもたちが思いやりをもてる「チャンス」にしていけるんじゃないかと思っているんです。

まずは人と人として相手と向き合う＝対話する

対話 から 未来 を つむぐ

一言一句聞き逃さないように...

今泉



## 制作委員会メンバー

高橋 晋一 先生  
埼玉県立越谷北高等学校  
教諭 | 英語・探究学習

小川 亮 先生  
北九州市立菅生中学校  
教諭 | 社会科・特別支援教育

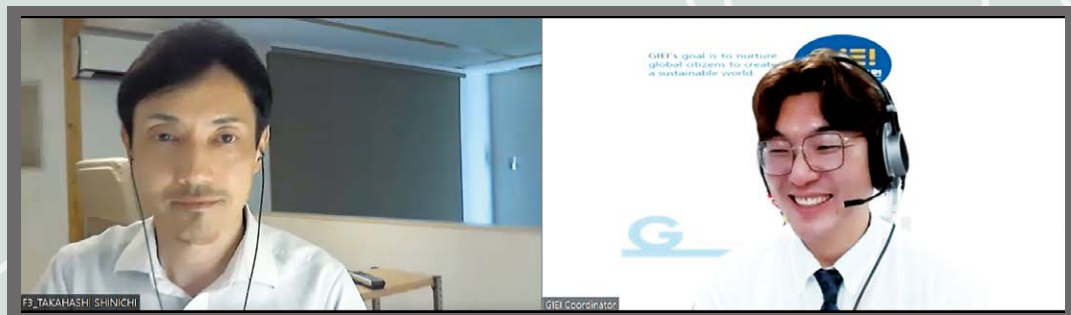
松野 至 先生  
名古屋経済大学市邨高等学校  
教諭 | 社会

ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)  
国際教育交流部  
進藤由美 部長  
伊藤妙恵 プログラム・スペシャリスト  
天満美嘉 プログラム・スペシャリスト  
株式会社デザイン・モイ  
今泉明子

先生方のご貴重な経験をご共有くださり、ありがとうございました！

天満





## コロナ禍を乗り越えて ～国際交流イノベーション～

SHINICHI TAKAHASHI



JOEN HONAM

高橋 晋一 先生

埼玉県立越谷北高等学校 教諭

ジョン・ホナム 先生

江原道教育庁 江原国際教育協会 国際教育部 教諭

### 対談の背景

埼玉県越谷市で英語科、国際交流・探究学習を担当する高橋晋一先生と韓国江原道教育庁に併設される江原国際教育協会で国際交流を推進するジョン・ホナム先生は、2021年韓国教職員招へいプログラム(オンライン) で出会いました。

多くの国々とのネットワークを有するジョン先生の精力的な活動に感銘を受けたという高橋先生。プログラム後も継続的に生徒を巻き込んだ交流を続けて来たお二人ですが、教員レベルにとどまらず、組織レベルで人々を巻き込み国際交流を推進するヒントを得たいという高橋先生の熱意により、対談が実現しました。

**高橋 晋一 (以下「高橋」)**： 本日はありがとうございます。先日、ジョン先生が司会をする青少年交流のプログラム「Japan-Korea meeting on international exchange programs in 2022」にオプザーバーとして参加させていただいて、とても素晴らしいプログラムで、感動しました。

私の地区の教育局にも国際交流課があるのですが、なかなか色々な国と交流するプログラムはないので、是非うちの地区の教育委員会にも紹介したいと思っているのですが、昔から先日のようなプログラムは韓国では主流なのでしょうか。

**ジョン・ホナム (以下「ジョン」)**： 韓国というより江原道の事例の紹介になりますが、昔からこういった交流をしています。ただし現在新型コロナによって直接の交流が難しい状態になっています

から昨年からはオンラインで交流を実施してきました。オンラインになりますと、学生や教師のみならずからもっと色々なコンテンツを実施してほしいという声が多いので、今はこのようなフォーラム等をコンテンツとして提供しています。今後もそのようにしていくつもりです。

日本と江原道との交流は、昨年初めてオンラインで開催しました。日本の学生が韓国の学生との交流を希望している方が非常に多いという風に聞きまして、今後より活発にしていきたいと考えています。

日本の学生たちとの交流を通じて感じたのですが、日本の学生が準備を非常に一生懸命きちんとやってくれる、そういった努力を非常に感じました。今回、高橋先生からもいい機会をいただいて春日部女子高校(高橋先生の前任校)を含めて、2つの国際交流プログラムを実施しましたが、今後も学生たちが参加できるようなプログラムを活発に実施していきたいと考えています。

**高橋**： 私の地区でも、地区内の優秀な生徒を募集してアメリカの MITやハーバード大学に行ったりするプログラムがあったのですが、コロナ禍でそれがなくなって、オンラインになっています。先日のプログラムを拝見して、海外に行って学ぶよりも、中身がすごく濃い内容だと感じました。そこはオンラインということで気を付けたことがあるのですか。秘訣があったら教えてください。

**ジョン**： まず、やはり同じように我々もオンラインで実施しています。安定的にオンラインで開催できているとは思いますが、やはり生徒の立場としては現場にいるという感覚が乏しいようで、時間が経つにつれて集中力や参加率というものが落ちてきているのかなというふうに感じます。ですから、来年からは我々も対面での実施を考えています。ただ江原道としては、オンラインとオフラインを混ぜてハイブリットで実施していくつもりです。

秘訣としては、大使館を通じてこういった海外の国際交流ネットワークを構築しています。韓国ユネスコ国内員会(KNCU)や ACCUを通じて高橋先生とお会いしたように、ほかの国ともそういった機関を通じて調整をしています。こういった信頼を基盤とした調整があるために深みのある交流ができていると思います。海外機関とは、時差の調整、学生の関心があるテーマの整理、対象とする学年、そういったところを事前に把握しておくことでプログラムが意味のあるものになっているのだと思います。江原道としてはこういった信頼できる機関との協業が大事だと考えています。そういった機関を通じて積極的に参加してくれる学校を選定すること、それから運用、運営の方針を事前に決めておくこと、これが安定的なプログラム運営において非常に重要だと考えています。

**高橋**： ジョン先生のプログラムは、今回、ニュージーランド、台湾、日本、韓国の4か国、今後は、ロシア、オーストラリアもひょっとしたらということが入っていたかと思うのですが、その規模の活動を、日本の各地域の教育委員会がやっているってそうそうないので、すごく可能性を感じました。

私も大使館と連絡することはよくあって、大使館の方に学校に来てもらったり、私が生徒を連れて大使館に行ったりします。すぐに連絡が取れたりすることもあります。返してくれなかったりもして…。ジョン先生には元々特別なコネクションがあるのでしょうか。



**ジョン**：そうですね、そういった人脈というのは特にはないんです。やはり高橋先生と私も同じ悩みを持っているのだと思います。大使館の対応というのは各国から派遣されている職員、その個人の意思にかなりよるのかなと思います。これまでうまくいっている国との交流というのは、その大使館の方、たまたま電話対応して下さった方の意思が非常に強かった場合だと思うんですね。我々、江原道も様々な国に連絡をしてきましたけれども、今までうまく協働ができているという国というのが、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア、タイ、ベトナムという国々です。うまく今協働できていない状況もありますが、バックアップも考えています。イタリア等にも交流を申し込んでいるところでして、自治体を通じて協働を申し込むのもいいのではないかと考えています。また、うまくいっている国に関しては、我々が特化したプログラムを持って連絡をしたというところも大きいと感じています。

国際交流の必要性を特に感じていない地域もあるというような話も聞くんですね。ただこういったほかの国との国際交流を少しずつ、小さなステップでも実施していくことで、その必要性をわかってくれるようになるのではないかと思います。そういう風にネットワークを構築していけると思います。また、学校に連絡をするよりも国際機関に連絡をした方がいいのではないかという思いもあります。

**高橋**：国際教育をあまり大事にしていない地域もあるんですね。

**ジョン**：数名の方たちに伺った話なので正しいかはわからないのですが、そういう状況があると聞いていますし、感じてもあります。それでも諦めずにドアをノックし続けてくださいねというふうに聞いています。

つまり、江原道としては高橋先生とこういう風に国際交流を是非していきたいと望んでいるわけです。

**高橋**：是非、来年日本に来て、私の地区に来てください。お待ちしております。ジョン先生が、国際交流プログラムをしていくなかで、大切にされていることって何ですか。

**ジョン**：大切なことというのはとても多いと思うんです。ただ、まずは海外の関係者の方たちとのコミュニケーション、出会い、考えていることの共有だと思います。これまでの経験を通じて、国際交流に大切だと思うことは非常に多いのですが、私としましては業務的なところというよりも関係者との関係ですね、これを重要視しています。

先ほどの話とも関連して、やはり一度プログラムを実施すると、その結果をもってまた他のプログラムを考えるようになるかと思っています。そういった中で引き続きプログラムをつくっていきながら関係を構築していけるというふうに考えています。

**高橋**：英語が母語ではない生徒も頑張っているのですが、プログラムで日本の生徒たちがしっかり準備していた反面、本番になるとあまり意見言わなかったりとかはありましたか？

**ジョン**：そうですね。準備をきちんとしているようでしたし、発表に関しても非常に上手にできていたと思います。これまで江原道で実施してきた国際交流の国々で英語が第一言語ではない国々はどこでも、こういった即興的に英語で答えるという部分においてはすぐ答えが出てこないというふうに感じました。ただそのような中でも春日部女子高校の皆さんは非常に答えることがうまくできていたということの評価したいと思います。今後日本と韓国の交流プログラムにおいて、日本語での交流プログラムはもちろんのこと、英語での討論会のような構想ももっています。そういった機会が増えていけば、生徒たちも適応できるような、即興的な能力や個人の力量も高まっていくと思います。

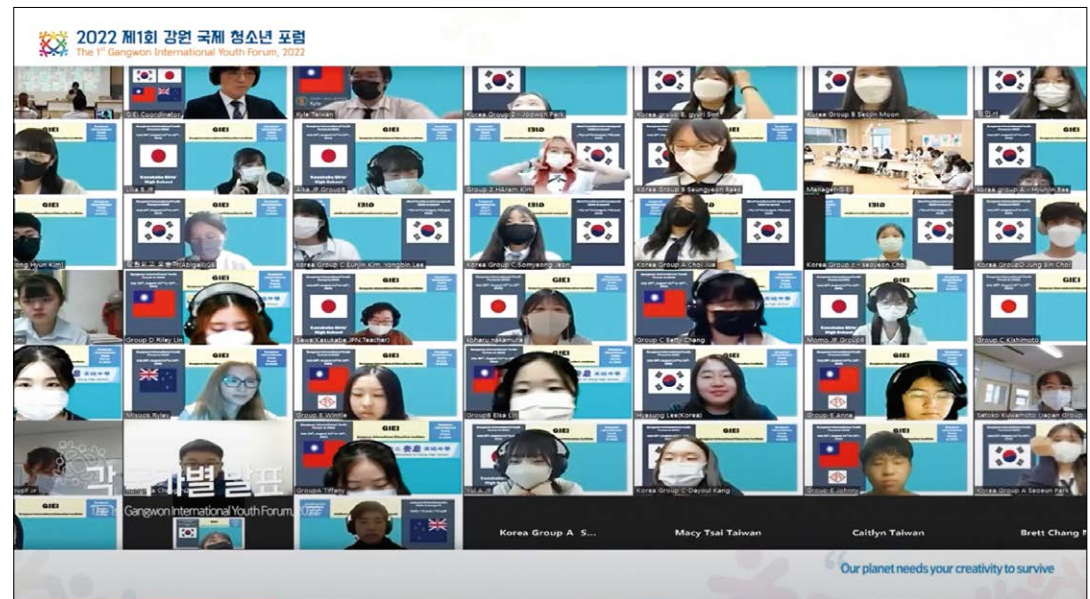
**高橋**：日本の高校用の学習指導要領の中で、英語に関しては今まで4技能「スピーキング」「ライティング」「リスニング」「リーディング」が評価項目だったのですが、今はその中の「スピーキング」がさらに「発表」「やりとり」の2つに分かれ、ジョン先生がおっしゃったように発表のところは準備すればできるのですが、今後の課題としては即興のやりとり、外国語での意見交換というところがすごく大事だなと思っていて、現任校でもそこが大きな課題になっています。

韓国の生徒の話も聞いてみたいのですが、日本だととにかくミスをおかすということを極端に嫌がる傾向があって、完璧な英語を話そうとするんですね。そうするあまり、結局即興でのレスポンスが遅くなってしまいうっていのをすごく感じています。ジョン先生が先日のプログラムで司会されていた時とか、思ったことをリズムよく英語で話していたので、ああいうのを生徒が聞くだけでもすごく勉強になるんじゃないかなって思いました。

**ジョン**：今回の江原道のフォーラムには、海外に滞在したことのある生徒たちが多く参加していましたので、英語に自信のある学生たちが多かったと思います。ですので、私としても、さっき自然と英語を話していたと褒めていただきましたけれども、そういうふうにスラスラと進行するしかなかったという実態があります。日本の学生たちの最も長所だと私が考えている部分は、英語に関して英語の発音がしっかりと聞こえるということです。先ほどの4つの技能に関して、やりとりの即興的なところというのは日本も韓国も同じく課題ではないかと思っています。やはり海外に滞在した経験のある生徒というのはどうしても英語が上手いですし、スピーキングに自信をもっていて、自分の考えをハキハキと喋れると思います。それに比べて海外経験のない学生というのはやはり制限があるかと思っています。制限がある中でも自分の能力を發揮しないといけない、事前に発表の準備をしておかないといけないというところはあると思うんですね。それでも日本の学生たちは準備した文章をしっかりと読み上げたり、単語がきちんと聞き取れるように発表したりする、そういうところが良くできていたと思います。これは重要な能力だと思います。

**高橋**：英語を通しての国際交流も大事だと思うのですが、ジョン先生も先ほど日本語での交流に関しても触れていましたが、春日部女子高校も第2外国語で韓国語を授業で取れるようになっていいます。日本国内で英語以外に第2外国語で中国語、ドイツ語、フランス語とかは結構あるんですが、韓国語って意外に少なくて。日本ではすごく需要があるはずなのに、教育までそういう仕組みがま

だできていないので、ぜひ韓国語を通しての国際交流プログラム、例えば1日目は英語、2日目は日本語、3日目は韓国語で交流等、そういう形もとても良いなとジョン先生の話聞いていて思いました。



写真提供：江原国際教育協会

**ジョン**：とても素晴らしいアイデアだと思います。江原道では、日本のある高校と1995年度から協約をしており、交流をしています。昨年はオンラインで交流会をしました。この高校とは日本語での交流をしているんです。昨年オンラインでの交流を通じて感じたのですが、韓国の生徒たちが日本に対してこんなにも大きな関心をもっているにも関わらず、何故1年に1回しか開催してこれなかったんだろうと、非常に惜しいという感情を抱きました。今後は日本でも、春日部女子高校の皆さんとも日本語での交流会などをやっていきたいと思っています。

**高橋**：ただ本当にパートナー校を探すのは大変で…。そういった時に ACCU のプログラムを通してジョン先生と知り合えたというのはとても大きな財産だと思っています。国内ではユネスコスクールとされている高校が非常に少なく、我々の地区(埼玉県)では公立高校はまだ1校もありません。ですのでもっとユネスコのネットワークが広まっていけばと思っています。韓国ではユネスコスクールの普及状況はいかがですか？

**ジョン**：江原道に関してお答えします。江原道のユネスコスクールの担当に私が昨年末に就任しました。江原道に現在ユネスコスクールは20校ほどあるのですが、その中でも活発に交流している学校はあまりありません。今後はこういったユネスコスクールで国際交流を活発にしていきたいと思っています。ユネスコスクールのネットワークを使ってこういうふうに関係を築いていけば、より良い

交流ができる、拡大していけるのではないかと感じています。私としてもユネスコスクールを増やす方向で今後努力していきたいと思っています。

**高橋**：先生の中にも国際交流やこういった活動に興味がある方がたくさんいるのですが、意外とユネスコの活動とか知らなくて。来月、「日韓教職員対話プログラム」(KNCU、ACCU 主催)の一環で韓国ソウルの2校の先生と共同授業と一緒に実施するのですが、それについてもはじめは、そんな素敵な活動があるんだってびっくりして、喜んでやってくれています。

私の今後の活動の中心は日本の若手の先生にこういったプログラムをもっと普及させることで、そのための組織づくりがやっぱり大事だなと感じています。もっとこのような素晴らしいプログラムを世の中に広めたい、そのための仕組みづくりが大切だなと考えています。

**ジョン**：先生の活動を応援しています。江原道とともに頑張っていきたいと思っています。

**高橋**：今、世の中でダイバーシティという言葉が広がって、多様性を認める一方で、悪くすると人のやることに対してあまり干渉しないというような風潮を個人的には少し感じています。そういった中で大きな戦争があったりして、国際的に高校生とか学生がオンラインでも繋がって対話をしていくことは、これからの将来の地球にとってすごく大切だと思っています。ジョン先生、今後はどういう活動をしていきたいとかアイデアはお持ちですか？

**ジョン**：今高橋先生がおっしゃったように、国際情勢に関する話、戦争ですとか気候変動に関する国際的な問題について対話をしてコミュニケーションをとっていくというのが非常に大事だと思っています。ですので、こういった国際情勢に関する討論や対話プログラムというのを実施していきたいと考えています。この場では江原道として掲げている方向性をお伝えしたいと思います。これまでの日本との交流と比べて変わっていくべきだと考えています。これまでは単に文化の交流でした。日本語を学ぶというふうに一方向的な交流が多かったように思います。今後は双方向的な交流をよりしていきたいと考えています。日本を含め他の国とも双方向のやりとりができる国際交流を活発化していく方針です。国際的な社会問題、例えばウクライナ戦争や気候変動の危機、こういったことに対して生徒間そして学校内では議論できているんです。今はこういったテーマを利用して、国際交流プログラムを計画して、推進しているところです。この討論プログラムというのは来年から計画しています。それは学生が主に進めていく予定です。もっとみんなが親しくなっていけるように計画をしています。国際交流プログラムというのは国際情勢の影響をどうしても受けてしまうものだと思います。国家間の関係の影響が及ぼされるものです。それでもこういった国際社会の問題というのを取り上げて協働関係を築いていきたいと考えています。

**高橋**：カムサハムニダ。私が今まで生きてきて、韓国の文化が今一番生活に入っているなと感じています。それはテレビでもネットでも韓国のエンタメがしょっちゅう出ていて、一方でニュースになると関係がちょっと良くないって話になって…。それはすごく不思議な感じです。私の娘

と妻は私の顔を見るよりもK-popアーティストのメンバーの顔を見ている時間のほうが長いので(笑)。ジョン先生がおっしゃったように、まずいるんなことを話していく中で「ここは触れちゃいけない」というところも徐々になくなっていけばいいなって。そういった点では、先生がやっている活動とか、私もこれから頑張ろうと思うのですが、こういった活動がすごく大きな可能性を秘めているなと感じます。

**ジョン**：(日本語で)ありがとう。先ほど率直に、日本とはこれまで一方的な交流関係だったと申し上げましたが、やはりセンシティブな問題に対して話ができる関係だったらどうかということに少し疑問を持たざるをえません。昨年からの日本の学生たちとの交流を3回してきましたけども、非常に学生たちが明るいと感じましたし、韓国の文化に高い関心をもって感じました。これからはもっと他の夢を見ていけないんじゃないかと思っています。センシティブな話題というのはちょっと後ろに置いておいて、共通の国際社会の問題に関して話し合っていけば、それが良い出発点になっていくのではないかと思います。江原道の国際教育委員としましては、高橋先生の活動を非常に応援しています。良い協力関係が築いていけたらと思います。

**高橋**：カムサハムニダ。ジョン先生とは前の学校で去年お話ししたことをきっかけに交流が始まって、まさかその時はジョン先生とこうやって1時間以上もお話しするとは夢にも思わなかったです。学生たちもぜひジョン先生が主催しているプログラムといったものを通して、それ以降お互いの生徒同士で個人的に付き合って、そういったところから初めてセンシティブな話とか、中身の詰まったものなんかも出来てくるのかなと思うので、是非そういう夢のある未来を築いていければいいですね。

**ジョン**：本当にそうですね。一緒に良い夢を持っていけると思いますし、今高橋先生がおっしゃったことに同意します。

**高橋**：ありがとうございます。ジョン先生のほうから最後に何かありますか？

**ジョン**：まずこういった意義深い場に招待していただきありがとうございます。私の話が助けになったかどうかは分かりませんが嬉しく思っています。先ほど、ソウルとの授業も準備中だとおっしゃっていましたのでそれも内容が気になりますが、それはまた後でご連絡したいと思います。先ほど高橋先生がおっしゃっていたプラン、実現可能な夢だと思います。そういった夢を高橋先生が見ていかれるということでしたら私が個人的にもそして公的にも業務面でも協働したいと思います。今後何かご提案等ありましたらいつでもご連絡ください。国際交流は今後も続いていくと思います。生徒たちがより交流できるようになってくればいいと思います。(日本語で)ありがとうございます。

(対談実施 / 2022年 8月 22日)

寄稿

## 「予測不可能な未来」が「より平和な未来」になるように 優しさを繋ぎ広げていく



ITARU MATSUNO

松野 至 先生

名古屋経済大学市邨高等学校 教諭



### はじめは教室から ——

#### 教科書と自分自身が生きる世界をつなげる

私が、生徒と共に国際交流に目を向けるようになったきっかけは、教室での高校生との学びの活動でした。この学びの活動は、3つの学習に分けることができます。

一つ目は、「国内外の出来事を生徒と一緒に学ぶ」活動です。教科書の学びの内容を、今起きている出来事と繋ぎ、知る活動を行いました。世の中で起きている出来事と教科書の中を繋げる主催者教育活動です。地球上では、さまざまな出来事が日々起きています。これらの出来事は、自分自身に大きく関係していることを新聞やニュース等を使い学びました。

二つ目は、教室内の1人1人の意見を可視化し、教室内の「多様な視点の優しさを学びあう」活動です。個々の生徒は、個性を生かした優しい意見を内面に持っていますが、本音で意見を言いにくい実態からアウトプットできない現状がありました。そこで、生徒同士の意見を匿名で可視化されるファシリテーションソフトと電子黒板を活用しました。個々の生徒のプライバシーを守りながら、それぞれの「多様な視点の優しさ」を可視化することで、教室内の個性を生かした優しい意見を共有し、自分の考えを深化させました。

三つ目は、一つ目の「国内外の出来事を生徒と一緒に学ぶ」活動と、二つ目の「多様な優しさを学びあう」活動を経て、どのような行動(Action)に取り組むことができるかを「自分の視点から考える」活動です。私自身は、生徒が現在起きている問題(未知なる環境の中)を自力で歩み、課題を解決する力(課題解決力)を育めるよう意識し、生徒の活動の伴走をしました。

この3つの学習の段階を経ていくうちに、学校内の活動だけでは解決できない課題に直面しました。国内外で起きている課題解決のため、「現地の声」をはじめ、「課題解決のために具体的に取り組んでいる NPO 法人の方の声」、「国内外の高校生の声」等を知る必要が出てきたのです。外部との連携なしには、解決のために活動することはできません。授業内だけでなく、授業外の活動、教室の外の世界へと実際に繋がり、そして、外部の方々と繋がることで、課題解決に向けた見通し(Anticipation)を立てることができるようになりました。

このように、①国内外で起きている出来事を知り、②個々の持つ多様な優しさを可視化し自分の考えを深化させ、③学校外の方々との協働活動を行うことで、自然と持続可能な開発目標(SDGs)、持続可能な開発のための教育(ESD)の活動へと繋がり、国際交流、地球市民活動へと接続していきました。

ESDは、より平和な世界を築いていくための具体的目標であるSDGsのすべての目標に寄与しています。「OECD ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030」の構成要素は、「学びの中核的な基盤、知識、スキル、態度と価値、より良い未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシー、そして見通し(Anticipation)、行動(Action)、振り返り(Reflection)のAAR サイクル」とされています。これらの活動を実際に行うにあたって、教職員が学校外の先生方とつながる活動である ACCUの「教職員国際交流事業」を活用したり、活動を進めながら様々な人との繋がりを構築していくネットワークはとて有用です。本校では、この後紹介するように、新型コロナのパンデミック前の交流が、コロナ禍の国際支援協働活動に繋がりました。

国際交流は、未来を生きる生徒が、国境を超えて起きる問題に対応し、「予測不可能な未来」を強く生きていくために、地球市民としての重要な視点を育むと感じています。



フェアトレード商品のお礼の応援幕を作成する有志メンバー

## ■ ノ・ユミ先生との出会い

ユミ先生とは、2019年7月、「2019年度韓国政府日本教職員招へいプログラム」(以下、韓国派遣プログラム)にて、水原(スウォン)外国語高校を訪問し、出会いました。韓国派遣プログラムでは、先生方のみならず生徒との交流を通じて相互理解を深め、楽しい時間を過ごすことができました。特に、高校生による日本語での発表では、生徒の地球市民の視点・優しさを感じました。この交流に参加させていただく中で、私自身が教員として「平和のために」どのように、教育現場に還元して取り組んでいくべきかを深く考えるようになりました。

プログラム後も、Eメール、Skype等を活用し、教員同士の友好関係を築くための交流を続けたことで、相互理解の促進、盤石なネットワーク構築へとつながりました。このように私自身が、ユミ先生をはじめとする水原外国語高校の先生方との国際交流活動を続けた結果、生徒の交流会開催へと繋げることができました。※「TREE of International Exchange 国際交流の木の下で」(P.36-37)より

水原外国語高校と本校の生徒同士のはじめての国際交流は、2019年11月、オンラインで実施させていただきました。この文化交流会では、両国の高校生で流行っている「食事、メイク、ドラマの紹介」、「進学の相談」などをテーマにグループごとに分かれて発表し合いました。交流会実施後の両校のアンケート結果から、韓国派遣プログラム同様に、楽しい交流会になったことがわかりま



した。当時、パンデミック前でしたので、ビデオ会議システム(Zoom)などは普及しておらず、Skypeを使用しました。事前打ち合わせや、事前の接続テストなど、連携して取り組み、韓国側、日本側どちらも、学校の先生方の協力を得ることができたため、スムーズに実施することができました。

このように、2019年7月の韓国派遣プログラム後、水原外国語高校と本校では、両国の学校での活動のほか、本校のユネスコ活動(SDGs有志)の国際支援活動等様々な情報共有を続けてきました。

一方で、本校のSDGs有志は、戦争や紛争から逃れた難民問題について、国連 UNHCRやJICAの方から学び続け、シリア難民女性の経済支援としてチャリティー活動(フェアトレード商品販売)や国連UNHCR協会への募金活動、UNHCR難民映画祭の開催等を外部の方々とも協働しながら、行動を起こしてきました。その学びの中で生まれた「戦争や紛争が終われば、平和になるのか?」との問

いから、紛争後のカンボジアの現状の学びも行なってきました。カンボジアへの支援活動は、現地の状況をオンラインで学ぶ中で生まれました。2019年8月には、貧困地域の公立小学校の敷地内に遊具が無いことに気がついたことから、地域と高校生の協働活動として「ブランコ寄贈プロジェクト」、そして「井戸改修プロジェクト」も実施しました。

2020年、コロナウイルス感染拡大によるパン



デミック発生後、水原外国語高校と続けてきた情報共有・交流、本校で取り組んできたカンボジアへの支援活動が交差する形で、次に紹介します「手作りマスク支援」に協働で取り組むことを決めました。

## ■ 水原外国語高校と実施したカンボジア支援プロジェクト 2020 & 2021

このプロジェクトは、水原外国語高校の高校生と本校の生徒が協働で、カンボジアシェムリアップ州プオ郡の公立小学校への手作りマスクを送るプロジェクトです。生徒たちが学びを続け、「自分たちにできることは何か」を考える中でこのプロジェクトは生まれました。この地域は、一日1ドルから2ドルで生活している地域です。カンボジアでも、日本同様に、コロナウイルス感染拡大により国境が封鎖され、各学校でも、生徒の安全確保のために、臨時休校措置がとられました。臨時休校が終了した後、教室ではマスクの着用が原則義務付けられましたが、日本国内同様に不足が続いていました。

日本、韓国両国ともに、先の見えないコロナ対応に追われる日々のさなかでしたが、学校間の交流、連携を続け、カンボジアへの国際支援を両校で協働して行うことができました。

この活動は、2020年度、2021年度と連続して取り組み、カンボジア教育省より感謝状をいただきました。



カンボジア国シェムリアップ州トロベアントム村教育省からの感謝状  
3カ国(韓国・日本・台湾)合同マスク支援プロジェクト(2020、2021)  
※感謝状内に3カ国の学校名がアルファベットで明記されています。



カンボジアに届いたマスクを着用する公立小学校の子どもたち



2021年11月12日(金) 中日新聞 朝刊掲載  
日本からの3万枚のマスクとSDGs有志生徒(中日新聞)



参加した水原外国語高校の皆さん(2020)



参加した水原外国語高校の皆さん(2021)

## 自分から行動を起こす だからこそ感じる苦労と温かい応援

外部の学校との交流をする上では苦労もあります。まず調整が必要になったことは、開催日時です。学校ごとに校時表や学校行事の実施時期等が異なります。国境を越えると、さらに、時差、長期休暇の時期やその有無、入試の時期などが大きく異なることから、日時の調整だけでも容易ではありませんでした。

また、学校外の世界で活躍する方々をはじめ、



研究者、地域の方々とも連携する場合、さらに、調整が必要となることが考えられます。

今後、外部との協働活動をより進めていくためには、教員自身が、外部と学校との調整役となる、ファシリテーターとしての力がより重要になってくると感じています。

また、予測不可能なトラブルも、プロジェクト実施の中で発生することがあります。2021年度マスク支援プロジェクトでは、国際輸送において、ブノンペンにマスクが留め置かれる事態が起きました。この際にも、多くの方々の力を借りることとなりました。



日本からの3万枚のマスクとSDGs有志生徒(中日新聞)

## ■ 様々な人々と連帯し、協働する幸福感

プロジェクトを実施する中での、やりがい、喜び、原動力は何かと言えば、多くの仲間との協働活動から得られる幸福感ではないでしょうか。何か国際問題が解決したわけではないものの、多くの人との協働活動であることから、優しさのつながりや、連帯感を強く感じることができました。

世界で活躍するの方々をはじめ、研究者、学校のリーダー生徒、教師、生徒、地域の方々、他国の高校生、他国の教師等で取り組んでいる協働活動時間は、まるで、大きな木(TREE)を育成させている時間と同じように感じます。

学校の中だけの学びではなく、学校外の人との活動によって生み出された「社会的ウェルビーイング」の概念とも繋がる活動だと感じています。これらの協働活動を経験した予測不可能な未来を生きていく生徒たちが、卒業後に大きな課題に直面した時、協働による課題解決へと繋げて欲しいと願っています。

こうした活動を継続して行なっていく中で、本校の末岡理事長や澁谷校長だけではなく、職員室の先生方、保護者、地域の方の応援をいただけるようになりました。2022年度からは、校内の「ユネスコ委員会」が発足し、ユネスコの理念を学び、自ら行動したいという生徒の集団が生まれました。

まだまだ小さな芽ですが、いつか大きな大木(TREE)になるよう見守りと伴走を続けていきたいと考えています。

多様な意見が存在する世の中ですが、一方では様々な人々と連帯し協働することで、カンボジアシェムリアップ州プオ郡の支援においては、北海道をはじめ全国の皆様から100通以上の応援のメッセー

ジと共に、2020年度は3千枚、2021年度は3万枚のマスクのご寄付をいただきました。さらに、企業の方々からの応援もいただき、マスクだけではなく、同地域への手洗い場の建設も実施することができました。また、戦争や紛争から逃れたウクライナ避難民支援のための募金活動では、85万円以上のご寄付を市民の皆様からいただき、国連 UNHCR協会へ寄付させていただくことができました。

## ■ 教師も地球市民として

相手校とのやりとり、プロジェクトを実施する中で、私がか大切にしていることは、2つあります。

一つ目は、地球市民教育 (GCED)の視点を、私自身が理解し、相手を最大限尊重することです。「GCEDは、学習者が国際的な諸問題に向き合い、その解決に向けて地域レベル及び国際レベルで積極的な役割を担うようにすることで、平和的で、寛容な、包括的、安全で持続可能な世界の構築に率先して貢献するようになることを目指すもの」(文部科学省 HPより)とされています。学習者が国際的な諸問題に向き合うための環境を作るために、まず、私自身が、両国の現状(社会的情勢)を深く理解し、地域レベル及び国際レベルで協働活動に向けて取り組むために、お互いを尊重することが最重要となります。

二つ目は、より広い社会の人々を含むステークホルダーを巻き込むことです。国際的な諸問題に取り組むためには、自分だけの能力、行動範囲のみで対応することは困難です。教員がファシリテーターとして、より広い社会の人々を含むステークホルダーを巻き込むことは、より良い解決方法へと導き、さらには、他者と協働することで、教員自身の専門外の探究活動にも生徒の伴走者として課題解決に取り組むことができるようになり、教育の質を向上させることに繋がると考えています。

## ■ これから、そして協働を続けてきた人々への思い

これからも、これまで同様に「人とのつながり」を大切にしたい平和活動(ユネスコ活動)を生徒と共に行っていきたく思います。

水原外国語高校の皆さんとの文化交流をはじめ、国際支援活動を通して、両国の平和への架け橋となるプロジェクトを実施し、明るい未来につなげることができました。

国内外の皆さんと取り組んだ活動は、地球規模の課題を自分事として捉え、探究する力を育みました。

また、日本と韓国の高校生がカンボジアの支援を通して、連携することができました。これからも皆さんとともにESDを推進し、国境を超えたユネスコスクールのネットワークを生かした取り組みを行っていきたくと思います。





## つながり、学びあい、アクションを起こす それは万華鏡の輝き

AKIRA OGAWA

小川 亮 先生

北九州市立菅生中学校 教諭



PUNAM RAJAGE

プナム・ラジャージュ 先生

Kai. Sadashiv Urf Bapusaheb Darekar, Pune  
Municipal Corporation School no. 174 - B  
Kondhawa bk. Pune, Maharashtra, India 教諭

### 対談の背景

福岡県北九州市で社会科・特別支援教育を担当する小川亮先生と、インド・マハーラーシュトラ州ブネー県でマラティー語・英語・数学・科学・社会科を担当するプナム・ラジャージュ先生は2021年インド教職員招へいプログラム(オンライン)を通して出会いました。プナム先生に出会って、日印の教育実践の共通点を多く発見し、インドのイメージが大きく変わったという小川先生。それぞれの場所で地域に根差したパワフルな活動を展開するお二人の対談が実現しました。

**小川 亮 (以下「小川」)**：プナムさん、今日はありがとうございます。僕は去年のインド教職員招へいプログラム(以下インド招へい)に参加したのですが、その時にうかがったプナムさんの活動に感銘を受けました。今日は、さらにプナムさんの魅力や、活動のきっかけ、どういう思いで取り組みをしているのかを聞きたいと思います。

**プナム・ラジャージュ (以下「プナム」)**：こちらこそ。亮先生にまず感謝を申し上げて、私からお話させていただきます。確か2009年頃から働いている学校で環境活動を開始しました。活動を始める前から、生徒たちはどういったことを学ぶべきなのか、学びたいと思っているのか、また生徒が何ができるのかを考えてきました。また、活動が始まってからも、その活動を通してどのようにそして何が学べるのかを継続的に考えていきました。正式に学校で環境活動を開始するに至ったのは、私の

学校があるブネーにおいて学校における環境活動を推進しようという施策が始まったことがきっかけでした。野生動物の保護に関する取り組みをもとに、子どもたちにブネーの自然公園における野生動物の生態などを伝えようと思って始めたのが最初です。インドでは、10月の第1週目は、「Wild life week」として野生動物の保護活動を行う週間と定められていて、その中で公園における野生動物の生き方、保護の必要性などについて学ぶ活動を取り入れました。具体的には、子どもが自分たちで台本を書いて劇をするんです。劇の中で子どもたちは動物の役を演じます。そして、その劇をいろんな人に見てもらうことによって、子どもたちだけではなく劇を見た人も野生動物について考え、前向きな捉え方をしてもらえるようになりました。劇の中で子どもたちが動物のお面をつけたんですけど、とても良くできていたんですよ。

そのほかにも、インドには「Rangoli(ランゴリ)」という文化があり、色のついた砂を用いて動植物などをモチーフにした絵を床や壁に描きます。このRangoliを作るのに必要な水やエネルギーについて学んだり、環境の問題、特にごみ処理に関して子どもたちが知りたいことについてオンラインアンケートを作って、70団体に送ったこともあります。その時は、100人以上の方々から回答をいただきました。また、コロナ禍において行った活動の1つに、ごみ箱コンテストがあります。生徒が新聞紙等環境にやさしい素材を使ったごみ箱を作って、いいものをコンテストで競うんです。10日間かけてごみ箱を作って、それを実際に地域で導入してもらいます。環境にやさしいごみ箱で、プラスチックなど通常のごみ箱と同じように使えるものというテーマで行いました。生徒は、どのようにして環境にやさしいごみ箱を作るのかを自ら考えます。例えば、ごみを入れた後のごみ箱を土に埋めたら、そのまま生物分解されるようなごみ箱等新しくエコフレンドリーな製品を生徒が自ら生み出しました。



**小川**：僕はプナムさんよりもだいぶ遅いのですが、2016年から活動を開始しました。もともとは社会科の教師で現在は特別支援学級の教師をしているのですが、日々生徒と関わる中で、子どもたちの自己肯定感の低さや自信の無さが多く見受けられました。そこで、生徒自身の課題の解決・改善に向けて何か取り組めないかと思って「エコネクトプロジェクト」を始めました。「エコネクトプロジェクト」は「エコ」と「コネクト」を合わせた造語です。特別支援学級に在籍している子は特に通常クラスにいる子どもよりも失敗する経験が多く、自信がもてない傾向が強いです。しかもですね、内閣府の平成26年の調査によると、諸外国他の国に比べて日本の子どもたちは全体的に自己肯定感が低いという結果が出ています。これを受けて、子どもたちが社会で貢献することによって、地域と



繋がり、自信をつけることができないかと思って取り組みを開始しました。なので、プロジェクトを行う時は必ず6つの関係機関、つまり、国際機関、地域社会、教育、NPO・NGO、行政、企業と繋がってプロジェクトに取り組みます。今まで、被災地支援活動と社会貢献活動、そして国際交流の3つのセクションで21のプロジェクトに取り組みました。ここでちょっとプナムさんに質問したいことがあります。おそらくこのプロジェクト一つ一つに子どもに対する色々な思いであったり、課題の改善であったりという、テーマがあると思うのですが、大きなプナムさんのテーマとしてはどういったものがありますか？

**プナム :** 私が行っているプロジェクトや活動に一貫しているテーマは自然保護と環境保護です。若い世代つまり生徒たち、子どもたちの手で自然保護や環境保護ができるようにすることを目指しています。

**小川 :** 2016年の活動を開始した頃の日本っていうのはまだまだ持続可能な開発目標(SDGs)も普及していないし、なかなか周囲の理解を得ることができませんでした。学校内でも「何かしているね。」っていう感じだったのですが、インドでは昔から環境教育が推進されていたんですか？

**プナム :** インドで環境教育が始まったのは1985年頃でした。その頃私もまだ子どもだったんですけど、学校で先生が自然保護について教えてくれたりとか、丘に植林を行うような環境保護の活動をしていましたので、学校において環境保護などについて学ぶ機会もありました。ですから、私自身が教育者となってからも常にこういった環境保護、自然保護といった活動を行っています。私の同僚の教職員も同じように子どもたちと共に環境活動を行っていきけるようにと勇気づけてくれています。

**小川 :** 僕の学校は、そんなことはなくて、活動を始めたときは、生徒を変えていきたいという気持ちが強かったです。当時、学校と外部が繋がるプロジェクトがありませんでした。なので、新たなプロジェクトに取り組むために、会社とか公共の施設などいろんなところに訪問して、一緒に活動してくださいってお願いをしていました。

**プナム :** それは素晴らしい取り組みですね。

**小川 :** ありがとうございます。実際に自分が行動し始めると、今回のインド招へいの様に、全国で活動したりしている方っていうのがすごく見えてきたんですね。僕はそこで気づいたんですが、子どもたちだけでなく、意外と大人もシャイな人が多くて。でも、活動を重ねるにつれ協力してくれる人が徐々に増えていきました。

去年インド招へいに参加して僕自身が期待していたこと、変わっていったらいいなと思っていたことが4つあります。まず1つ目が自分自身の成長、知識の習得。2つ目が新たな繋がり。それから3つ目が知識の習得と繋がりを生かして子どもたちに還元すること。そして4つ目が同僚、後輩の道しるべとなること。プナムさんは今回の交流で期待していたことって何かありますか？

**プナム :** 今回の交流プログラムに参加するっていうことは私としては新しい取り組みでありました。そしてこの交流プログラムへの参加を通じて自分自身を、そして私が行っている活動を他の国の先生方、特に今回は日本の先生方に知ってもらいたいと思ったんです。私自身の活動を日本の先生方に紹介するとともに、私自身も日本の先生方から知識を得られるのではないかと思います。日本の先生はすごく勤勉で熱心に頑張っている方が多いと伺っておりましたので。

**小川 :** 僕もインド招へいに参加してプナムさんと知り合えたし、新たな発見っていうのがたくさんあったんですね。でも、日本の大人っていうのはシャイな人が多い。なので、国際交流にも参加したいけどなかなか参加できない人っていると思うんですね。プナムさんのようなエネルギーでアクティブな部分があれば良いんですけど…。何かこう意欲的にアクティブに活動するための助言というか、プナムさんがモットーとしていることはありますか？

**プナム :** そうですね。先生方は誰でも内に秘めた輝きを持っていると思うんです。ただ、一方で十分に自信を持っていないという方もいらっしゃるのではないかと思います。私たち教師の仕事って生徒の前で話さなきゃいけないですよね。私が考えるに、自分たちが教える生徒って神様のようなかたちで私たちを見ているのではないかと思います。何も口にして言うてはこないんだけど、常に教師のことを見ているんですね。そういった存在である生徒に対して教師自身が自信を持って話せるようになることが必要だと思いますし、そのためには教師自身が例えば環境のことを教えるのであれば、環境に関する知識を十分につけて自信を持って話せるという風にすることが良いのではないかと思います。亮先生のSNSも拝見していて、環境活動をされていたりとか、色々な方との取り組みとか、そういったかたちで伝えたりとか周りに広げていくことで他の人たちにインスピレーションを与え、刺激をしていくような、そのような活動ができるといいのではないかと思います。

**小川 :** インドはプナムさんのようにエネルギーな人が多いんですか？

**プナム :** そうですね。やはり日本の先生と一緒に、インドの教師にもいるんな人がいます。特に



インドは、地域ごとの特徴が非常に強いので、それに影響を受けてしまうということもあると思います。ですから、先生としては授業をすることに対してすごく自信を持っているのに、メディア等に対してはあまり積極的ではなく、そういうところではうまく話せないという人もいますね。

**小川**：僕もプナムさんみたいなエネルギーな先生になれるようにカレーをいっぱい食べたいと思います(笑)。

**プナム**：私も亮先生に近づけるようにそうしたいと思います(笑)。

**小川**：プログラムを実施していくにあたって苦労したこと、大変だったことってありますか？

**プナム**：私はブネーという限られた地域で活動を行っているのですが、特に人間関係で問題に直面したことはないんですけど、私の生徒の中には問題に直面した子たちもいました。例えば、ごみ処理に関するプロジェクトを行っている時に、子どもたちが地域の高齢者の方にインタビューをしようとしたんですけど、なかなか応じてもらえないということがありました。それどころかばかにされてしまったこともありました。プロジェクトを行うにあたってそういった対応をされてしまうと、どうしても気持ちが下がってしまいますよね。そこで今一度どういった目的で活動をしているのかということをしかりと説明できるように時間をかけて準備をして、それからインタビューをさせてもらうということになりました。

それから、コロナ禍における問題もありましたね。ごみ処理に関するプロジェクトを行っている時に、学校から4~5km離れた場所にバイオガスプラントがあって、そこを訪問しようとしていたんです。ただ新型コロナウイルスの感染が拡大していた時だったので外出禁止令が出て、警察が検問をしていたりして、行く手段がなくなってしまったんです。そこで、活動趣旨や感染対策について警察の方にも説明し、生徒の親御さんの協力も得て、このバイオガスプラントの訪問を実現させました。そういったかたちで警察署や社会からの理解やサポートも得られました。結果として、子どもたちが衛生検査を行っている人たちにインタビューを行って、どのようにごみの分別をしているかなどの情報も得ることができました。

**小川**：日本では、アンケートやインタビューなどは比較的よく受け入れてくれるんですが、核家族が増えていて、なかなか中学生と高齢者が関わる機会が少なくなっています。なので、子どもが大人と関わるのも下手だし、大人・高齢者も子どもと関わるのがうまくいかないことがあります。ただ、プナムさんの活動と同じで人との関わりがないと必ず成功しないっていうのがあるじゃないですか。ちょっと面白い話があるのですが、「エコネクトプロジェクト」は少数でやっていたので実は活動予算が無かったです。そこで、僕が原稿を書いて、全国のいろいろなアワードに書類を提出して賞金をもらうってことをしていたんですよ。休みの日に子どもたちがお小遣いの中からバスに乗って活動する場所まで来てご飯も自分で用意してっていうのはちょっと可哀そうだなと思ったので。ある時に大きな賞をいただいて、その授賞式で生徒たちが活動を発表することになりました。



原稿を何百回何千回も読んで練習して授賞式に臨んだんですが、実際本番になると緊張しすぎて読めないんですよ。生徒もパニックだし、亮(小川先生ご自身)もパニック。15分の発表だったんですが、30分かかってやっと発表することができました。生徒は「練習したのに言えなかった」「失敗した」って言って泣きそうな顔で落ち込んでいました。その時に僕は「次頑張れば良いよ」くらいで、うまく生徒をサポートできなかったんです。ただ、その授賞式にたくさんの人がいたんですけど、生徒が一生懸命発表しようとしていて口が動いていたところを見てくれてたんです。発表しようとしている、でも声が出ない。その姿を見た人が授賞式後に「感動したよ」「良かったよ」って生徒に言いに来てくれました。通常は失敗経験になるところですが、周囲の大人のサポートによって失敗経験が成功体験へと変わりました。私も緊張していましたし、教師も失敗することもある。まだまだ身につけないといけないことがあるんですが、プロジェクトを行うにあたってたくさんの人に見守られながら一緒に活動するっていうことは子どもにとって大切なことだなと思いました。そして2つ目のパンデミックについてですが、コロナ禍だから制限がたくさんあると思います。ただ、僕は、コロナ禍だからこそチャンスになってきていることもあるかなと思うんですが、プナムさんは今の状況をどう捉えていますか？

**プナム**：やはりコロナ禍において私たちの生活は大きく影響を受けたと思います。特に子どもたちにとって環境活動も含めて、これまで計画してきたことを進める中でコロナの影響で根本から見直さなければならないこともありました。また、子どもたちの行動パターンっていうものが変わってしまった部分もありました。そういった中で特に自分のことについて何か発表するにあたって自信を持ってもらおうという風に思いました。亮先生がおっしゃったように、子どもたちがみんなの

前で話そうとすると、どうしても緊張してしまうことはインドでもよくありますので、そういったことも踏まえると、やはりクラスではみんなの前で、また社会における活動であれば地域社会の人たちを前に発表するような機会をもうけることにしています。

**小川**：僕の今後の活動ビジョンですが、日印の交流プロジェクトを継続して続けるようにしていきたいと考えています。そして世界中の人を巻き込みながら活動していきたいと思います。教師としてのビジョンとしては、いつも活動に悩んだ時に万華鏡を思い出します。それはなぜかというと、万華鏡って使う人が回さないと状況が変わらない、綺麗な景色になっていかない。ただですね、そのパーツ 1つ 1つには不必要なものっていうのが 1つもなくて、全てみんなで力を発揮することによって成立します。なので、僕もいろんな活動をしながら今後も子ども達と共に成長していきたいと思っています。

プナムさんの今後の日印プロジェクトを通してのビジョンとプナムさん自身の目標っていうものはありますか？

**プナム**：今後のビジョンとして、まず生徒はもちろん、幅広い世代が環境意識を高めていけるように活動を行っていききたいと考えています。また、社会における今後のビジョンとしては、これまで行ってきた植林活動を今後も続けていききたいと思っています。私はこれまで 350本以上の植林を行ってきました。今後もこの活動を広げていききたいと思っています。そして国際交流におけるビジョンとしては、やはり今後も亮先生をはじめとする日本の先生方と積極的にやりとりをさせていただきたいと思ったり、タイなどの他の国の先生ともやりとりをして、私たち教師が世界各国の他の教職員と繋がり、皆さんが取り組んでいらっしゃるからこそ学び、この美しい海や綺麗な空気のあふれる環境を守る活動を共に進めていくことにつなげていくことができたらと思っています。

私は、幸運なことに、学校の校長、自治体の市長、またインド教育省からの支援をいただき、日本や世界の他の国の先生方とも交流させていただく機会にも参加することができています。今後もこういった交流活動を継続して、熱心な取り組みをされている先生方とつながりを持って、お互いに学びあっていければと思っていますし、私が行っている活動を皆さんにも共有していければと思っています。

**小川**：ぜひ日本で一緒に植林しましょう！僕もいつか必ずインドに行きたいと思っています。

**プナム**：はい、休みが取れればぜひ日本を訪問したいと思います。もちろん亮先生もインドにお越しいただきたいと思っています。

**小川**：今日はありがとうございました。プナムさん、これからも子どもたちのより良い未来のために一緒に活動しましょう！

**プナム**：はい、そうですね。こちらこそありがとうございました。

(対談実施 / 2022年 8月 19日)

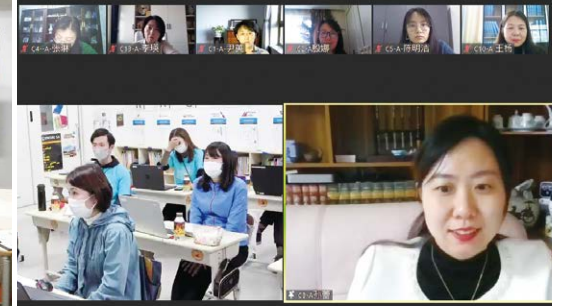
## 第 3 章

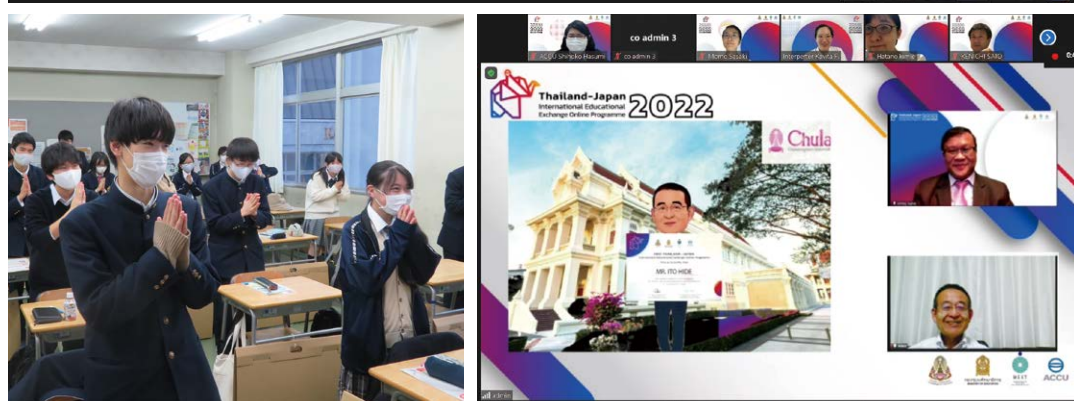
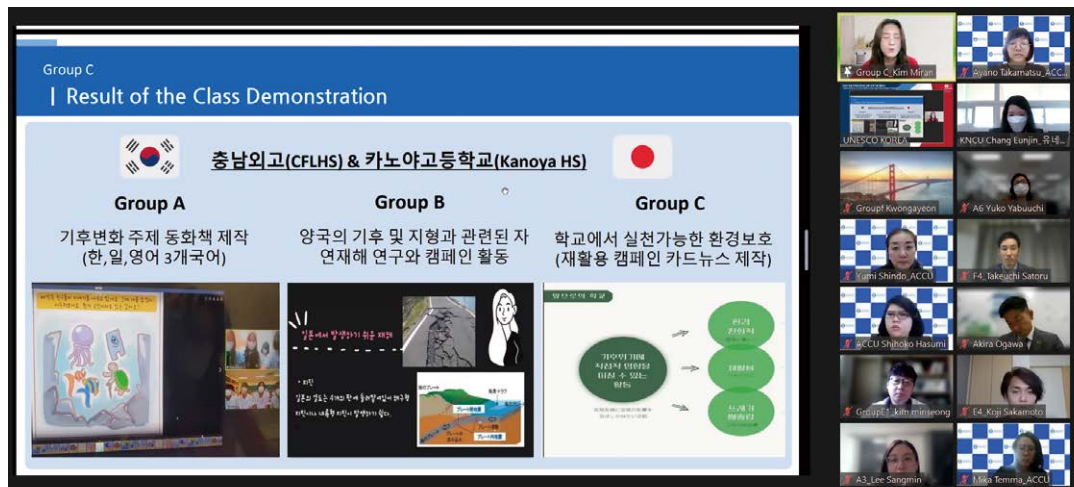
# 教職員国際交流のコロナ禍の今



TREE-admin (管理者) が更新を投稿 1日前

社会に様々な変容をもたらした新型コロナウイルス感染症の拡大。2020年に日本国内での流行が本格化してから、ACCUの事業を取り巻く環境も大きく変化してきました。そのような中でも、ACCUは国内外の接点づくりに力を入れ、多様な文化、価値観や考え方に触れる機会を創出し、相手と向き合い、対話することを大切にしてきました。難しい状況にあっても、次世代を担う子どもたちを育む先生方が、誰かの発信を通してではなく、自らの経験に基づいて考えるきっかけを提供することが大切だと考え、それを続けてきたのです。本章では、2020年から現在までのACCUの教職員国際交流事業の様子を一挙にご紹介いたします。





5 🍊 315

スタッフ  
こぼれ話

対面編

- ・ 11月末の東北を訪問したタイの先生たち。普段は着る機会が少ない「冬服ファッションショー」が開催されました！
- ・ インドの先生を囲んで、日本の児童館で輪になってダンス！ユニークな動きが楽しくて、子どもも大人もエキサイトしました。
- ・ 中国の学校の文化祭で日本の先生たちが歌を披露。ステージがある芝生には千人を超える生徒と保護者が。さながら野外フェス！

オンライン編

- ・ 韓国から記念グッズと箱いっぱいのお菓子が日本に届きました！離れていても心のこもった贈り物に一同感激しました。
- ・ オンライン交流会に愛犬が参加！ペット愛がつなぐ交流もオンラインならではの。



TREE-admin (管理者) が更新を投稿 6 時間前

実際にオンライン国際交流プログラムに参加された皆さんのご感想です！

現代の重要なテーマについて教師が議論する国際的な舞台というコンセプトが気に入りました。地球の子どもたちの未来のために話し合うことは、今必要なことだと思います。

プログラム中のすべての活動によって、コミュニティをベースとした教育行動においてアクティブラーニングと ESD がどのように活用されているのかが見える化されました。

日本の先生や生徒と交流することで多くのことを学び、私たちは同じ船に乗っているのだと実感しました。

国際情勢が不安定な中、これからの世界を担っていく若者に、その舵取りを託すことになる。そこで重要なのは教育であり、教育者である私たち教員自身が、国際交流や世界平和について日頃から考えることが必要だと考える。

国、文化などが異なるが、共に「教育」に携わっている人同士が交流することで気づきや共感を得られたり、教員自身が異文化に触れることで、その人自身の内面の成長につながり、それが児童生徒への関わりや授業にも反映される。教員自身が様々な価値観に触れて豊かな心をもつことはとても大切だと思います。

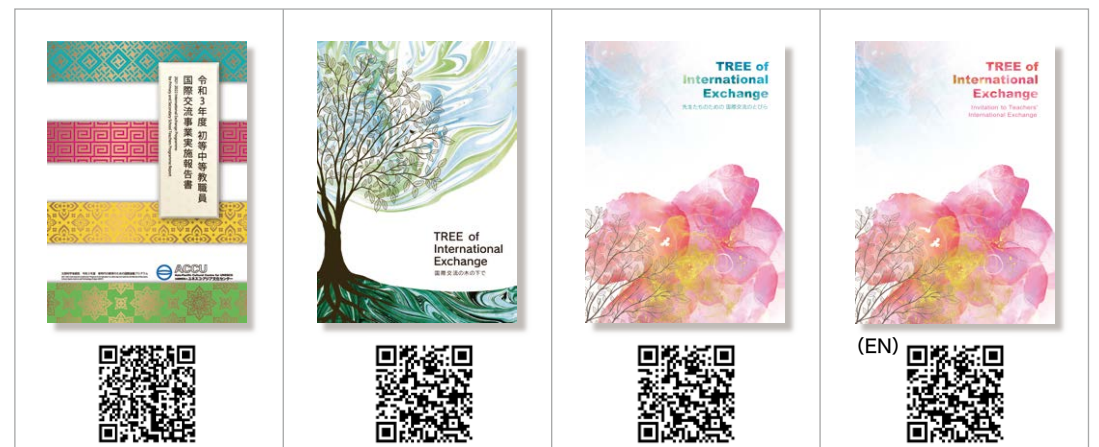
中国と日本の先生のオンライン交流で、私も恩恵を受けました。日本の授業の様子を通して、自分の授業を深く振り返ることができました。学生中心の核心は何か？日本の先生が生徒と接している姿を見て、その答えの一端が見えたような気がしました。

0 🍊 280



TREE-admin (管理者) が更新を投稿 20 分前

国際交流事業に関する制作物のご紹介です。QRコードから PDF をご覧いただけます！

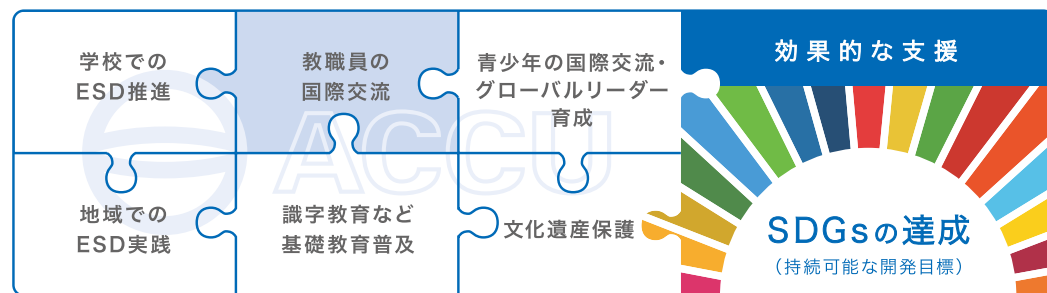


# ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)について

## ■ ACCUとは？

ACCUは、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の基本方針に沿って、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献します。

東京と奈良の2つの拠点から、アジア太平洋地域のユネスコ加盟国と協力して教育協力、国際教育交流、文化遺産保護教育の分野での事業を推進しています。2021年4月に設立50周年を迎えました。



SDGs: Sustainable Development Goals

## ■ ACCUと教職員国際交流事業

ACCUは2000年度から約20年にわたり、国際機関および政府機関の委託を受けて、教職員間の国際交流事業を企画・実施・運営してきました。2022年度は、文部科学省委託「令和4年度 新時代の教育のための国際協働プログラム」のもとで、日本と韓国・中国・タイ・インドの4か国の教職員を対象にした交流事業を実施しています。



©仁科勝介

<https://www.accu.or.jp/>

<https://www.facebook.com/accu.or.jp/>

メールマガジン(月1回配信)のご登録:

ACCU広報担当(kouhou@accu.or.jp)まで「メールマガジン登録希望」と書いてご連絡ください。

## おわりに

本冊子を最後までお読みいただき、ありがとうございます。交流の手引きは、いわゆるガイドライン的な手引書ではありません。「国際交流の木の下で」(2020年度版)、「先生たちのための国際交流のとびら」(2021年度版)に続き、3部作目となる今回は「対話から未来をつむぐ」というサブタイトルが示すように、交流を通じた出会いと対話を重ねたうえにそれぞれの未来が描かれていきます。

制作するにあたり我々 ACCU自身にいくつかの方向性を決めました。一つは、制作委員会を組織して企画段階から先生方と協働して進めていくこと。つまりは、ACCU実施の交流プログラムに参加された経験がある先生方や制作物のデザインや印刷・製本そのものを担ってくださる方を制作委員として企画段階から巻き込むこと。そして二つ目には、先生方の経験を伝えることに主眼を置くのではなく、先生方同士のインタビューや議論を通して、国際交流の楽しさや難しさをお伝えしつつ、先生方の内面の変化、学びの変容を紐解いていくことです。

さて、高橋先生とジョンホナム先生との対話では、学校としてどのように国際交流のネットワークを構築すればよいかについての議論が展開されました。何か特別な人脈に頼っているのではなく、信頼を基盤とした地道な調整の積み重ねや失敗してもめげずに小さな一歩へとつなげることが大切である、といった示唆がありました。小川先生とブナム先生は地域に根差したそれぞれの教育実践について熱く語っておられました。まずは先生自らが行動し始めること、そして失敗経験も含めて楽しんでしまうことで自然とまわりの協力を得られるようになったことについても言及されておりました。松野先生とノ・ユミ先生との出会いからは、まずは教員同士の相互理解の促進とネットワーク構築、そしてその継続した活動の先には生徒同士の交流がありました。このように三者三様の「対話」のどこかに共感を覚えてくださる読者の方がきっといらっしゃると思います。

ACCU国際教育交流事業のCore Value(基本的価値)は、国境や地域を越えた教職員の「出会い」と「対話」の学びの場づくりです。この事業の主役は先生です。先生方の声に耳を傾けながら、今後も様々な機会をつくって参ります。最後になりましたが、企画段階よりご協力いただきました小川先生、高橋先生、松野先生、そしてデザインを通して先生方の熱量を可視化してくださった株式会社デザイン・モイの今泉様に心より感謝申し上げます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

国際教育交流部長 進藤由美

## TREE of International Exchange

- 対話から未来をつむぐ -

---

発行日	令和5年(2023年)3月1日
発行	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 東京都千代田区神田神保町1-32-7F 出版クラブビル TEL : 03-5577-2853 FAX : 03-5577-2854 URL : <a href="https://www.accu.or.jp/">https://www.accu.or.jp/</a>
制作協力(掲載順)	高橋晋一、小川 亮、松野 至、ジョン・ホナム、ブナム・ラジャージュ
対談通訳協力	株式会社ISS
デザイン・印刷・製本	株式会社デザイン・モイ (アートディレクション / 今泉明子、デザイン / 高井美月)
編集	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 国際教育交流部 進藤由美、伊藤妙恵、杉戸卓磨、高松彩乃、天満実嘉、蓮見詩保子
編集統括	天満実嘉、伊藤妙恵

©ユネスコ・アジア文化センター2023

ISBN978-4-909607-12-6

Printed in Japan 禁無断転載・複製

この冊子は文部科学省委託 令和4年度「新時代の教育のための国際協働プログラム」により作成されました。

